

第28回報農会シンポジウム『植物保護ハイビジョン—2013』
—— 生産環境の変化と作物保護技術の再評価 ——

侵入雑草の防除対策

宇都宮大学・雑草科学研究センター 米山弘一

要約：雑草の種子や繁殖器官は、日本以外の国や地域から日本国内へと絶え間なく侵入する。その侵入経路は多様である。侵入雑草の防除対策で最も重要であり効果的なのは侵入の防止であるが、個人旅行者が無意識に、あるいは意図的に持ち込む場合、完全に防止することは困難である。また近年では、ネットショッピングで植物防疫法に関わる輸入禁止品である雑草の種子さえも購入することが可能である。本稿では、世界の農業生産に大きな被害を与えており、一旦侵入すると防除が極めて困難である寄生雑草について、その特殊な生理生態および生存戦略について解説し、防除対策について考察する。

宮城県におけるイネばか苗病発生の現状と防除対策の検討

宮城県古川農業試験場 鈴木智貴

要約：近年宮城県では、イネばか苗病の発生が増加している。その背景には環境保全型農業の推進に伴い、温湯浸漬法などの環境保全型種子消毒技術が急速に普及したことが要因としてあげられる。本病が最も問題となるのは水稻の種子生産の場面であり、種子生産ほ場における対策を早急に検討する必要がある。そこで、本病多発ほ場からの孢子飛散がどの程度の距離まで影響を及ぼしているかを明らかにし、種子生産ほ場周辺の発生ほ場の有無から、圃場審査の際の判断指標を設定した。また、水田での発生を未然に防ぐためには育苗期の発生を抑制し、本田への持ち込みを少なくする必要がある。そこで、温湯浸漬処理後の育苗行程における発病助長要因を検討し、本病の発生を抑制する育苗管理技術を明らかにした。これらの結果は農協・農業改良普及センターのご協力により、宮城県の農家に広く周知され、実践していただいている。

育苗箱施薬の病虫害防除効果の再評価

鹿児島県農業開発総合センター 井上栄明

要約：鹿児島県は、東アジアを熱帯地域から段階的に北方移動するセジロウンカ、トビイロウンカ、コブノメイガが国内の他の地域より頻繁に到達しやすい地理的条件にある。

育苗箱施薬は、薬剤を田植え作業と同時にイネ株元に処理し、周辺環境への飛散も作業者への暴露もほとんどない画期的な作物保護技術である。施薬初期は薬剤のイネ体濃度が高く、漸次濃度は減衰する特性を持つが、初期の高濃度で薬害を出さず、低濃度でも殺虫効果を発揮する新規剤が開発され、田植え時の処理だけで、梅雨期に飛来が繰り返されるウンカ類を長期間防除できるようになった。1994年以降、育苗箱施薬は本県の普通期水稻の8割以上に取り入れられ、殺虫・殺菌剤混合タイプのものを中心に水稻病虫害防除の基幹技術となった。その後、東アジアにおけるトビイロウンカ多発生を背景に2005年秋期に九州各県でトビイロウンカによる坪枯れ被害が発生し、残効期間短縮すなわち育苗箱施薬剤の低濃度での効力低下の懸念が生じた。翌2006年、2007、2009～2112年も本県でのトビイロウンカ発生面積は全体の5割を越え、坪枯れ被害が珍しいものではなくなってきた。2013年も8月初旬でトビイロウンカの発生は5割を越えており、また葉いもちの病勢に注意を要するほ場も認められている。今後、育苗箱施薬と組み合わせる本田後期防除剤に望ましい特性を持つ化合物が見出され、その省力的、効率的な施薬技術が開発され実用に供されることを期待したい。

EUにおける農薬事情

農薬工業会 横田篤宜

要約：農薬は、ヒトの健康や環境に影響を及ぼす可能性があることから、日本においては農薬の登録、販売および使用については、農薬取締法で規制されている。

一方、EUにおいては、従来91/414/EEC指令に従って、評価・登録がおこなわれてきたが、ヒトの健康や環境に与える危険性の規制が農薬使用場面でできていないことから、2011年6月に新たな農薬規則（Regulation (EC) No.1107/2009）および農薬指令（2009/128/EC）が発効され、リスク評価に基づく承認の判断から、有害性（ハザード）に基づくカットオフ・クライテリアおよび比較評価手法に移行した。

つまり、導入された考え方は、『疑わしきは罰すべし。』とする予防原則に則ったものであり、今後、農業現場で必要な化学農薬の登録が削除され、作物保護面で必須の農薬がなくなり、EU域内における農業・食料生産に多大なる影響を及ぼす可能性が危惧される。

国内花卉（菊）の生産動向と課題

イシグロ農材株式会社 古橋友雄

要約：菊は奈良時代に中国より伝わり、江戸時代には育種開発も進み大衆の花として庶民にも親しまれ、平成の現在においても国内で最も生産量と消費量の多い切り花です。

平成7年から平成13年の7年間は年間20億本以上の国内生産を行ってきましたが、様々な周辺環境の変化により徐々に生産量が減少し、平成24年の生産量は16億本まで減少しています。20年前に現在の重油価格は到底、想像できませんでした。また、TXWV（黄化エソ）の様なウイルスが菊に発病する事も全く、予想できませんでした。その様な状況の変化の中でも、生活者の花として菊が使われ、親しまれるお手伝いをしたいと思っています。そのためには様々な関連業界の方との連携を強化し、菊生産者が抱える課題や問題点を理解し、何か一つでも良いから役立つ提案をしたいと思っています。今回のセミナーでは様々な方に現在の菊生産の現状と課題を知って頂き、何かアイデアを頂ければと思いお話をさせて頂きました。